

The Interview

人間の持っているマイナス面を認めあえるのが家族です。



少子・高齢化が進む中、いま、家族のあり方が問われています。男女共同参画の時代に入り、21世紀の家族はどう変わっていくのでしょうか。また、妻と夫はどんなパートナーシップを築いていったらいいのでしょうか。家族をテーマにした数々の作品で注目されている脚本家の山田太一さんにうかがいました。

山田太一さん

21世紀の家族に伝えたいメッセージ

どんな時代にも「理想の家族像」なんてないのです。

高度経済成長期の典型的な家族が抱える問題を浮き彫りにした『岸辺のアルバム』は、当時衝撃的な作品だったと思うのですが、この作品をお書きになった動機をお聞かせください。

あの作品を書いた1970年代は、サラリーマンがマイホームを持つことが可能となり、子どもが大学へ進学することがごく普通になってきた時代です。夫は

家族のために働き、妻は家事や子育てに専念する役割分業が確立し、これが最も安定感のある理想の家族のスタイルと思われていました。

けれども、それは幻想に過ぎず、妻は子育てを終えると、一人家に取り残されます。息子は学校から帰ってくると塾へ通い、娘は大学生活を楽しみ、夫も毎晩遅いので、妻はテレビを相手に孤独な一

日を過ごすわけです。

このような家族の状況はいまとあまり変わっていないと思うのですが、当時はこうした妻の存在に光があてられていませんでした。

ドラマでは、孤独な妻が、何とか自分の時間を持つと、ボランティアに参加したり、カルチャーセンターへ通ったりしてあがきますが、結局満たされないのです。あのドラマを書いた動機の一つは、家族のなかの妻の孤独にスポットをあてたかったからです。

夫婦間暴力、児童虐待、いじめや少年犯罪など、様々な社会問題が起きるたびに、家族の崩壊が叫ばれています。本当に家族は崩壊しつつあると思いますか。

たしかに家族を支えてきた枠組みのよくなるものは揺らいでいると思います。私が育った頃は、まだ食べることに必死の時代でしたので、とにかく家族がつながっていなければ生きていけなかった。それが生活が豊かになり、無理につながりなくてもよくなったわけです。家族崩壊と言われる背景には、「貧しさ」という拘束力がなくなっただけだと思います。

なかには、そのうち家族はなくなってしまうとおっしゃる方もいます。しかし、私はそんなことはないと思います。なぜなら、現在、家族に代わり得るものがないからです。

かつては「お国のため」といった一体

感を感じる大きな共同体がありました。いまはそう思える人はごく少数でしょう。また、地域や会社のためという人も少なくなっています。だから、家族がなかったら、まるごと所属して一体感を感じる場所がないわけです。

私はこれからの家族は、つながっていることを安らぎと感じ、帰るとほっとするような感情集団になっていくと思います。

家族は「個」の集まりでもありません。家族に安らぎを求める一方で、「個」の生き

プロフィール◆1934年生まれ。早稲田大学教育学部卒業、松竹に入社。木下恵介氏の助手を経て、1965年、フリーの脚本家に。「岸辺のアルバム」「ふぞろいの林檎たち」「男たちの旅路」などの話題作を手掛ける。また、脚本のほかに小説も発表。『異人たちの夏』（山本周五郎賞受賞）、『丘の上の向日葵』『親にできるのはほんの少しばかりのこと』など著書多数。



「夫婦の形」に縛られすぎると、女も男も生きにくいと思います。

方を実現しようとする、家族の存在がわずらわしくなったり、不満も出てくると思うのですが……。

社会的なつながりは、何かプラス面がないとなかなか築けません。しかし、家族はプラス面だけで決してつながっているわけではないです。

私は家族は否応なしの関係だと思おうのです。否応なしの関係は、マイナスのようには考えられていますが、私は家族ではむしろ救いだと思おうのです。親は隣の子より自分の子のできが悪くても取り替えようがありません。どうしようもないから受け入れるしかない。この宿命性が救いになるのです。

人間はこの宿命性を認めなくてはけません。どんな人にも向き不向きがあります。多かれ少なかれ、みんなマイナス面の宿命を抱えて生きています。それを認めあっているからこそ、人間的な環境があるわけで、そうしたことを深く教えてくれるのが家族だと思おうのです。

これからは老齢期の夫婦のあり方も大切になってくると思います。特に会社中心に生きてきた男性は、リタイア後の妻との関係づくり戸惑うことが多いのですが、ともに豊かな老後を送るには、どんなパートナーシップを築いていったらよいとお考えですか。

奈良の唐招提寺に行ったときのことですが、なんと周りは老夫婦ばかりでした。しかもみんな同じような服装で。もちろん、両方で楽しんでる夫婦もいるでしょうが、きつと大半はどちらかが我慢しているのではないのでしょうか。

みなさん、形にとらわれ過ぎていると思おうのです。男女共生という、一緒に何かしなくてはいけないと思込んでいる。もっと一人で楽しむことも覚えたほうがいいと思います。片方が自立して生きれば、もう片方も楽に自立できるのではないのでしょうか。

最後に、男女共同参画社会を実現していくうえで、これからの家族に必要なことはどんなことがお聞かせください。

子育て支援だと思います。もちろん、子どもを持たないという選択も認められなければなりません。子どもを産み育てるといふ営みは、社会の軸として大切なものです。

しかし、いまの社会は経済中心です。お金を稼ぐということに高い価値をおいているから、女性が一人前の扱いを受けない面もあるのです。もっと社会は子育てに対して敬意を払うべきだと思います。敬意がないから、子育て中の女性は「私の人生これでもいいのかしら」と悩み、そこだけ空白になったように感じてしまうのです。

私は最終的に家族はやはり手放せない

ものだと思います。

社会の役割は入れ替え可能なものが大半ですが、家族は違います。家族のようには不合理なもの、自分で選択できないものの中に、本当の幸福感があるのだと思います。この選択できない家族こそ、人間の宝だと思います。

通信員◆相馬 匡さん

山田さんのお話をうかがって



家族のなかの「自分」を見つめ直す

私も定年まで仕事に追われ、なかなか家族とかかわる時間が思うように持てなかった一人です。「会社は業績がよくないと、簡単に人間をリストラできますが、家族はできが悪くても見放すわけにはいかない」と淡々と語る山田さんの言葉から、家族の持っている存在価値に改めて気づかされたと同時に、家族の中の「個」の生き方についても見つめ直してみることが教えられました。特に私たち定年を迎えた世代が直面している夫婦関係において、生き甲斐に向かってお互いが「個」として自立すること。特に夫は家事などは妻に依存しないよう、そしてできる限り妻の邪魔をせず、自由を尊重するよう生活を改めるべきだと感じました。

※通信員：公募により「You & Me～夢～」の編集に関わっている市民です。